

海外都市事情 フランス編

～中世のロマン バスティード～

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 教授 伊藤 ^{いとう} ^{たけし} 毅

バスティードとの出会い

「バスティード (bastide)」という言葉をお聞きになったことはあるだろうか？ よほどのフランス通ではないかぎりおそらく初耳だと思う。かく言う私もバスティードの存在を知ったのはごく最近のことである。そしていま毎年のようにバスティードを訪れ、その尽くせぬ魅力にすっかり入れ込んでいるところだ。

バスティードとは、特定の都市の名前ではな

く、13世紀から14世紀にかけて建設された中世都市の一群を総称する言葉である。バスティードはアキテーヌ地方を中心とした南西フランス、イギリスのウェールズ地方、スペイン、イタリア、さらには北欧にまで分布し、その数おおよそ500といわれる。特にポルドーやトゥールーズがある南西フランスにはたくさんのバスティードが集中し、300余の都市が確認されている（図-1）。

私はいままで主として日本の都市や建築の歴史を研究してきたので、ヨーロッパの中世都市といえば、ヴェネツィアに代表されるように道路が曲

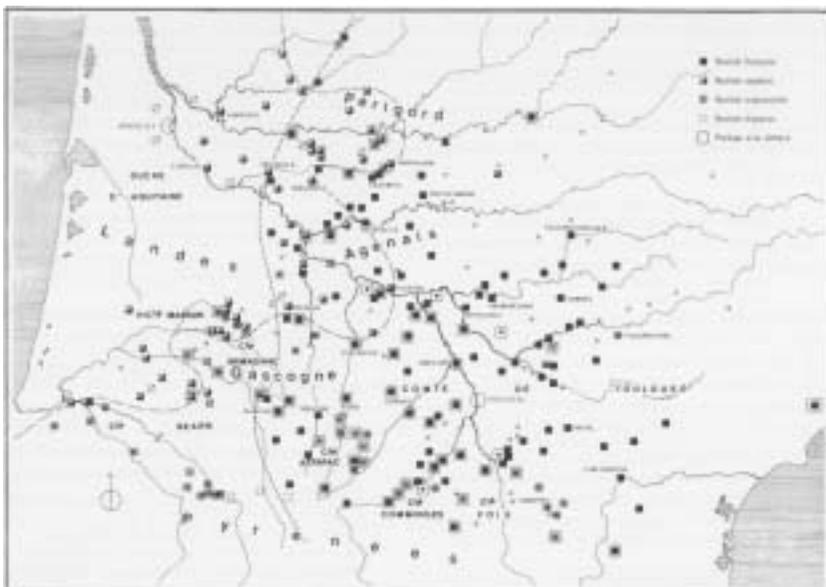


図-1 バスティードの分布

がりくねった迷宮都市が一般的だろうぐらいの常識しか持ち合わせていなかった。実際、ヨーロッパのさまざまな都市は中世にイスラム化したものが多く、古代ローマ都市の整然とした都市プランは次第に崩れていって、狭い道がまるで迷路のようにめぐる不規則な都市へと変容していったことは確かな事実である。

しかしその一方で、新しく開拓されたフロンティアや交通の要衝では、ある背景から新規に都市が建設され、まるで古代ローマ都市を思わせるように整然とした碁盤目状の道路が通された。そして新しく生まれた都市には多くの商人や職人が住み、広場を舞台に活発な交易活動が繰り広げられた。こういう都市の存在を知って驚いたとともに、がぜん興味がわいてきたのである。

バステードとは何か

バステードは主に13世紀から14世紀のフランスとイギリス（当時はイングランド）の緊張関係の中で建設された。これはやがてジャンヌ・ダルクで有名な英仏百年戦争へと推移していく。フランス南西部のアキテーヌ地方は、ポルドーワインで知られているように良質のブドウの産地で、豊かな農村地帯であったが、この地域の支配を巡って英仏が主導権争いをする中で、南西フランス一帯に建設されたのがバステードという中世新都市であった。

ではバステードとは何か。つまりバステードの定義ないし条件は何か。当初バステードとは、建設に当たって、王・諸侯・在地領主・教会権力との間における領主間契約（パレアージュ）があり、住民の自治や慣習を保護する特許状（フランシーズ証書）をもつもので、少数例だが、例えばモンフランカンなどでみられる慣習法（クチューム）を備えた都市を指し、形態的には広場を中心とした整然とした格子状の都市計画が施され、市壁や市門などの防御施設をもつものであると考えられた時期があった。

しかし一つひとつのバステードをみていくと、この条件をすべて満たす都市はほとんどなく、やがてバステードはむしろそれぞれの条件の中で、多様で個性的な存在形態を示しているという理解へと移行していく。

一体なぜバステードがこんなにも多くつくら

れたのだろうか。バステードを建設する目的はどこにあったのか。大きくみて、四つの動機があったと考えられる。一つは、統治拠点の設置のために。例えばサント・フォワ・ラ・グランドという都市は、ルイ9世の弟アルフォンス・ド・ポワティエによって建設されたバステードだが、当該地周辺の所領の拡大と権威の確立をはかるために、大修道院長や分院長などと交渉のすえ建設されたことが指摘されている。そして1255年にパレアージュが締結され、翌年慣習特許状が住民に与えられた。

二つめには英仏の主導権争いの結果、建設されたものが挙げられる。必ずしも統治拠点という意味合いはなく、特定の地域への合法的介入権を強化するために、碁石を打つようにしてバステードを建設していくというケースである。

三つめは、交易の拠点都市としてバステードを建設するというもの。私はこのインセンティブがバステードの初発動機として、最も重要なものではなかったかと想像している。

最後に、先にみた植民定住のための都市建設がある。例えばジモンという都市はシトー会系の修道院による開墾でできた町で、上からの都市建設というよりは下から沸きおこる定住運動の結果、修道院がまとめ役となって町ができるというストーリーを描くことができる。

バステードの再発見と地域の研究

建築の分野では、19世紀に修復建築家として活躍したヴィオレ・ル・デュクというフランス建築家が有名である。彼はフランスのモニュメントの修復を精力的に手がけ、多くのモニュメントの保存に尽力した。デュクはこうした歴史的建築の修復を通して、多くの中世建築に関する知見を得て、それを集大成した『中世建築事典』という大部な本を出版した。この中の「建築線」および「家」の項に、実はバステードが登場する（図-2）。デュクの中世建築研究は、当時フランスで一世を風靡しつつあった、ロマン派による中世再発見運動の一つとあってよく、これ以降、バステード再発見の動きに拍車がかかり、地域史研究が進められていくことになる。

1983年にバステード研究所が創設され、バステード間のネットワークや研究交流のセンター

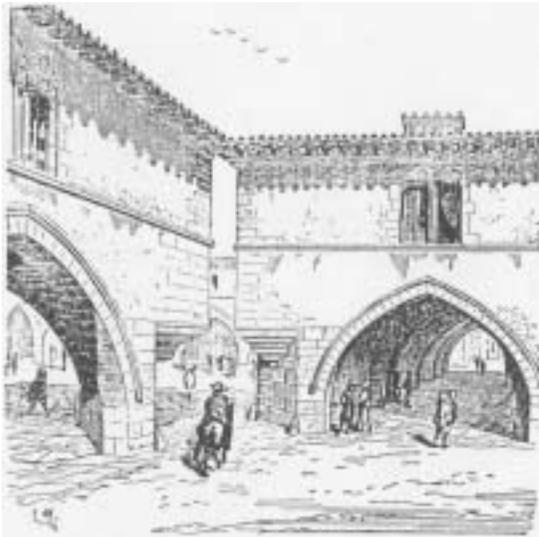


図-2 『中世建築事典』挿図

ができた。

フランスでは「最も美しい村」という、地方の美しい景観を残す都市や集落を選定する制度があるが、バスティードのいくつかはこれに選ばれており、観光資源としても重要な位置を占めるに至っている。ここではバスティードであり、最も美しい村に選定されている三つの町を紹介しよう。

ソーヴテール・ド・ルエルグ

ソーヴテールの町が創建されたのは1281年、ルエルグ地方の代官だったギョーム・ド・マコンが、当時のフランス王フィリップ・ル・アルディの名のもとにこの町を建設したと伝えられている。

都市プランは正方形を井の字型に9分割した、きわめて単純な平面をしていて、その中央が広場になっている（図-3）。ただ、各街区を詳しくみると、きちんとした正方形にはなっておらず、平行四辺形状になった街区があることが分かる。

この理由は不明だが、少なくとも街区を割り出すのにさいして、整形な直角よりは街区一辺の長さを優先したことが想像できる。それはとりもなおさず、宅地分譲における間口割の均等性に関係していたはずだ。

広場の四周にはアーケードが巡り、広場がま



図-3 ソーヴテール・ド・ルエルグ都市平面図

もって交易の場として機能していたことをうかがわせる（図-4）。教会は広場に直接面さず、路地を引いた奥に建っている。このように、バスティードにおいて、教会は広場の主役となるケースはきわめて稀で、広場の対角線上あるいは街区を隔てた位置に置かれるのが一般的である。これはイタリアなどで一般的にみられる、教会前広場とは異なるストーリーの中で、広場が形成されたことを想像させる。

各宅地は道路に直接主屋が面する、いわゆる町



図-4 広場（ソーヴテール・ド・ルエルグ）



図-5 アンドローヌ

屋型の建築が建ち、中庭を挟んで奥には納屋や厩舎などの付属屋が置かれるのが、標準的な土地利用である。隣接する建築は共有壁をもつものと、アンドローヌ（図-5）というわずかな隙間を隔てて建つものに大別できるが、これも他のバスティード住宅に共通する特徴である。

モンフランカン

モンフランカンはガロンヌ地方の美しいバスティードで、観光名所でもある。硬い白色石灰岩の台地が作り出した丘陵地の上にある（図-6）。明確な創設目的は分かってないが、当時の人口増加の動きを考えると、分散して住んでいた民衆を徐々に集住させることがその動機の一つであったはずで、慣習法によれば2000人規模の住人が想定されていた。また周囲を遠望できる小高い丘陵地にあるということから、防衛上有利な立地であった。

創建は、在地領主がモンフランカン建設のためアルフォンス・ド・ポワティエに1252年、領地を譲渡したとしている。

1289年には620人の住民がいたという記録が残っている。住宅は住人ら自らの手によってつくられ、広場中央には市を開くための建築物（レ・アール）が建てられ、広場北東の対角線上の街区には教会も創建された。

城壁は後に築かれたもので、イングランド王エ



図-6 モンフランカン航空写真

ドワード1世が門と塔をアキテーヌ地方のセネシャルに、城壁をモンフランカンの住人に建設するよう命令した。英仏百年戦争の影響はこうした防御施設以外にも認められる。考古学の分野で、モンフランカンの古いハーフティンバーの木造住宅の木材年輪測定が行われているが、14世紀の材が一つも検出されず、この時期バスティード内での建設活動はまったく中断していたことが明らかになっている。

この都市で注目されるのは、主要道路と路地（カレルー）からなるシステムティックな構成である。これは次にみるモンパジエではさらに徹底したものになるが、モンフランカンのカレルーは上部にポンテと呼ばれる住宅2階の張り出し部が各所に増設され（図-7）、高密度な都市居住が進展していったプロセスを辿ることができる。

モンパジエ

モンパジエはバスティードの中で最も有名な都市であり、都市プランもきわめて整然としたかたちとなっていて、バスティードの典型といえる都市だ。13世紀後半、イングランド王エドワード1世の命により、防衛強化策として国境地帯に建設



図-7 カレルーとポンテ

された。

モンパジエはバステードの中で最も幾何学的に整ったプランをしていることから、このプランがどのように導き出されたのかについて、いくつもの試案が報告されている。まずプランを割り出す基準点（パル）の存在があったことが指摘されているが、その位置については諸説がある。また

街区のプロポーションからみて、3対4対5の直角三角形が町割りのモジュールとなっていたことも推定されている（図-8）。

モンパジエは整然とした都市プランとともに、主要道路と路地カレルーがきわめてシステムティックに都市を組織している点でも特異である。こうした都市組織を下敷きとして建つ住宅を調査すると、敷地境界を越えたきわめて複雑な空間の相互貫入の実態が明らかになってきた。モンパジエはバステードの中でも、複雑に都市化を遂げた都市といってよく、住宅のいろいろな部分も他の都市と比べずいぶん洗練されている。

先にみたソーヴェテル・ド・ルエルグには木造のハーフティンバーが多かったが、この町ではむしろ石灰岩系の石を使った石造の住宅が卓越している。

バステードは都市というより、農村に近い。しかしそこには都市的な雰囲気が横溢している。フランスはこうした地方の小都市をととても大事にしている。わが国の地方都市の惨状を目にするとき、こうしたのどかな地方都市がフランスのようになんとかうまく維持できないものかという思いを強くする。



図-8 モンパジエの都市計画推定図